

# 定礎

令和2年9月

《表紙》信徒修練所(ベネディクト館)

1階/個室1、ホール、キッチン、風呂、多機能トイレ

2階/個室4、風呂

玄関前スロープ、館内エレベーター

2020 年 10 月 23 日 落成祝福式

設計・施工/新発田建設株式会社

### 祝福式の説教中に朗読された詩「ゆずり葉」(河合酔茗)

子供たちよ

これはゆずり葉の木です

このゆずり葉は

新しい葉が出来ると

入り代わってふるい葉が落ちてしまうのです

こんなに厚い葉

こんなに大きい葉でも

新しい葉が出来ると無造作に落ちる

新しい葉にいのちをゆずって一

子供たちよ

お前たちは何をほしがらないでも すべてのものがお前たちにゆずられるのです 太陽のまわるかぎり

ゆずられるものは絶えません

かがやける大都会も

そっくりお前たちがゆずり受けるのです

読みきれないほどの書物も みんなお前たちの手に受け取るのです 幸福なる子供たちよ

お前たちの手はまだ小さいけれどー

世のお父さん, お母さんたちは 何一つ持ってゆかない

みんなお前たちにゆずってゆくために いのちあるもの、よいもの、美しいもの を、一生懸命に造っています

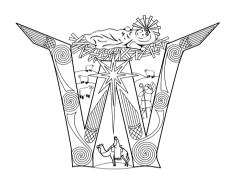
今, お前たちは気が付かないけれど ひとりでにいのちは延びる

鳥のようにうたい、花のように笑っている間に気が付いてきます

そしたら子供たちよ もう一度ゆずり葉の木の下に立って

ゆずり葉を見るときが来るでしょう

### 主のご降誕と新年の お喜びを申し上げます。



2020年も主のご降誕を迎え、新しい年を迎えようとしています。今年は年の初めからコロナ危機に世界中が翻弄されました。このような大変な状況の中にあっても皆様からの物心両面の温かい御援助をいただき、本当にありがとうございました。

さて今年は3月から信徒修練所(通称ベネディクト館)の改築が行なわれ、工事に携わられた多くの方々のご尽力のお蔭で9月末日に無事完成しました。多くの方々がここで祈りと休息の時を過ごせるようにと私たちは願っております。お待ちしています。

尚、10 月に院長交代があり、Sr 高橋和子に代わって Sr 岡島静代に引き継がれました。

来る年もどうぞよろしくお願いいたします。

希望のうちに心からの感謝を込めて

平和の元后修道院 姉妹一同

# マスクのお話し

#### Sr. 関雅枝(在フランス)



まだ人類がコロナウイルスの脅威に曝されていないころから、日本人はよくマスクをかけていた。当時私は、モンサンミッシェルのすぐ隣の修道院にいて、定期的に本部修道院に出かけていたので、移動中高速道路のサービスエリアなどで観光バスから行列をなして降りてきた人が、みんなそろって白いマスク

をかけていたのを、奇妙な気持で眺めていたものだ。日本人がマスクとともに旅行する姿は何かとても滑稽で、それを見る人たちの顔にある種の嘲笑さえ見えたので、内心いやだな一と思っていた。流感の季節になるとフランスでも病院の待合室などに、手の消毒と病気に罹ったときにはマスクをするように奨励されたポスターが貼られていたが、手を洗うことはともかく、実際にマスクをかける人など誰もいなかった。本当にマスクをかけることで病原菌の蔓延を防げるのだろうか…という不信感の方が大きかったのではないかと思う。

毎年流感の季節になると共同体は次々と寝込むか、声を失って聖務で歌えなくなる姉妹が出るのが常で、2004年のインフルエンザパンデミックの時には、会で5~6人の死者を出したものである。ところで2~3年前の流行時一人の姉妹が外出した折、インフルエンザを持ち帰った。彼女は共同体の中で諸々の役を引き受けていてとても寝込める状況になかったので、熱を持ちながら、給仕その他危ない仕事を続けなればならなかった。そこで彼女が取った処置は、マスクをかけて仕事を続けることであった。私がマスクの効用を目の当たりにしたのはこの時だった。特に彼女は毎朝私を起こし洗面、服を着せるなどしてくれていたのに私は罹患を免れたのだ。あぁマスクが流行を抑えるって本当なんだ…という思いであった。

世界中が公衆の中でマスク使用義務づけている今回、決定的な治療法もなく多大な死者を出していて、私のいるパリ全域では流行の盛り返しで再び制限を強化された地域が増えている。教会でのミサ参加も座席の間隔2mのうえマスク使用、人々は感染を恐れ不安のうちに生きている。これらは日本の教会でも同様であろう。ブ

ルーの共同体では院内にはいなかったが、入院先の施設で一人の姉妹が罹患し、97 歳と言う歳にもかかわらず立ち直った。また創立者の甥に当たる 95 歳の司祭が感 染したものの、彼もだいぶ弱ってしまったが、抜け出てみんなをホットさせた。で も多くの隠世修道院で感染者を出し、ある共同体では3人もの修道士を失った。ま たある共同体では全員が陽性反応を示して一人だけ陰性だったそうで、その一人は 何と門番の修道士だったと言う笑い話もある。とにかく家族にしても、共同体にし ても共に生きているものは、良きにつけ悪しきにつけひとりだけは許されないとい うことらしい。共修共同体は、自分で選んだのではない人と兄弟姉妹として、とこ しえまで結ばれているわけである。それだからというわけではないが、多くの共同 体で、院内ではマスクなしで生きている。つまり家族並みというところだろう。 他方、毎日介護のために来て下る方々、病院で働かれる方々はコロナ事件以降、手 指の消毒とマスクの使用は以前考えられない厳密さで実行されている。現在私は本 部修道院の工事に当たって、2 か月に渡り(10 月~11 月)、パリ西側にある病院に 来ている。それで、修道院にいたときには考えなかったマスクに関する側面を体験 したので、それを分かち合いたい。長々と書いてきたが、これが分かち合いたいこ との本筋なので、もうしばらく付き合っていただきたい。

顔の半分を隠してしまうと、今まで見過ごしていた半面に出会うことがある。ひとりのオーモヌリ(患者を訪問するグループ)のメンバーが訪ねてくださったとき、私は不思議な居心地の悪さを感じた。彼女はマスクの下で満面の笑顔を私に向けていることは見えなくても確かなのだが、その微笑みが私の内面に届かないのだ。彼女の目は笑っていない…と私は思った。顔の下半分が隠れてていたので上半分が強調されてしまったのかもしれない。別に私が嫌いなわけでもあるまいが、何か苦しみを隠しているのかな…と思ったりした。また次の方が訪問してくださったとき、彼女の嫌みのない親切と善意がひしひしと伝わって、思わずお顔を見せてくださいますか?とお願いしたら、むき出しの歯を見せて笑っていた。この方は神の子の喜びを生きていると感じた。もともとマスク使用が始まってから、私は初対面の方に会うと必ず、離れたところでもいいから顔を見せてくださいとお願いしている。マスクをかけた方と初対面すると、名前にしても出来事にしても、間違うことおびただしいのだ。それに人間同士の伝達はただ言葉だけでないと思っているからでもある。その中でも顔の表情の語ることは大きい。その半分を隠されてしまうと、名前を覚えるという単純なことも、サッといかないのは私だけであろうか?

ある日の朝、一人の介護者が朝食を食べさせてくださった。彼女はマスクの上の目を細めて、「おいしいですか?」「昨夜は十分眠れましたか?」等と話しかけてくる。私はその眼差しの奥に悲しみを見た。そして、二言(こと)三言(こと)他愛のない会話の後、彼女は「私は神を信じません。」と切り出した。「どうしてですか?」と聞き返すと「実は難しい息子を抱えているのです。」…そうこうするうちに食事がすみ彼女は私のそばを離れていった。ところがそれから、彼女の目が優しさをましたのである。私は何もしなかった。あるいは神を信じている私に「信じないよー」とぶつけてさっぱりしたのだろうか。マスクの下の顔はそれ以上何も語ってくれない。

不思議なマスク、不思議な人間のお話し。



### 自い十字器の花

Sr.Maria Ignatia (塩澤幸子)

初夏から真夏にかけて、こちらの修道院の玄関と聖堂の間 の中庭にドクダミが群生して一面に白い花が咲きます。

数年前に修道院に来て、草取りの作業をしたときにドクダミに出会いました。素朴で可憐で清楚な十字架のような白い4枚の花弁(実はこれは花を保護する葉)とハート形の葉っぱに目を留めると、中心に真黄色のめしべのようなもの(実はこ

ちらが花)が凛と立っていて、躍動感と生命力にあふれるその姿に見とれてしまいました。しかし、で修練長から根こそぎ刈り取るように指示されたので、泣く泣く心の中で「ごめんね」と言いながら、片端から根っこから葉も花もすべて刈り取った日のことを思い出します。

今年は新型コロナウイルスと例年にない長梅雨や豪雨、猛暑などでこちらの生活 もさまざまな変化がありました。これまでの生き方や生活を見直す機会が与えられ る中で、私は仕事や勉強であれこれ忙しく、また、共同体の人間関係に悩み、自分 の弱さに直面して心の余裕がありませんでした。

心身に疲れが現れ、無性に息苦しく感じたある日、図書室にある星野富弘さんの詩画集(『風の旅より』) をパラパラとめくっていたときに、ドクダミの絵と詩に目がとまりました。

「おまえを大切に摘んでいく人がいた/臭いといわれ嫌われ者のおまえだったけれど/道の隅で多くの人の足許を見上げひっそりと生きていた/いつかおまえを必要とする人が現れるのを待っていたかのように/おまえの花 白い十字架に似ていた」

星野さんの描く絵も詩も本当に優しくて、花に対する愛情がダイレクトに伝わってきて、また、詩の言葉のひとつひとつから聖書の中でイエスさまが野の花に向ける慈愛に満ちた眼差しと言葉が思い起こされて、私の心は喜びに満たされ、ずっしりと重い心がす~っと軽くなりました。

ドクダミは名前から毒を連想させ、独特の強い臭いと繁殖力のため、敬遠する人も少なくありませんが、漢方では十の毒を消すと言われている貴重な薬草のひとつです。昔、母親が身体にいいのよと言って飲ませてくれたドクダミのお茶のことを思い出しました。

花言葉を調べてみたら「野生」、「白い記憶」、自己犠牲」「野生」の3つがありました。「野生」は強い繁殖力から、「白い記憶」はドクダミの葉を揉んで傷を治してくれた母親の懐かしい面影のイメージに由来しています。「自己犠牲」は毒を消す作用を持っていることから、自分の命を犠牲にして人の役に立つイメージに由来していることが分かりました。殺菌や毒消しの薬効があって人を助けるのに、毒草のような名前がつけられて人から敬遠されるのもある意味では自己犠牲かもしれません。この花は日陰にひっそりと、必要がなければ刈られてしまう運命だと分かっていても、強くたくましく、誇り高く、揺ぎなく、必要な時に必要な人のために白い十字架の花を咲かせるのです。自分につけられた名前も、人からどう思われているかもまったく気にしていないのでしょう。もし、花に心があるのならそれは唯々、無心の境地で精一杯、その季節を生きることだと思います。花から生き方を教えられることはたくさんあります。

私も自分に与えられたこの生命を一途な心で、前向きにひたむきに生きていきたい。自分を捨てて誰かのために…。

来年、修道院の庭にドクダミの花が咲くのが楽しみです。



### 神さまへの賛美

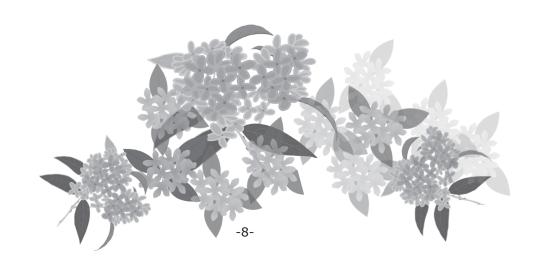
Sr.Maria Faustyna 小林清美

想像を絶するような暑さが連日続いた夏が過ぎ、秋になりました。

ある日、修道院のお庭の柿を収穫することになり、他の姉妹と一緒に柿を採っていたとき、かすかな香りが風に流れて届いてきました。振り返ると、すぐそばにあるキンモクセイにわずかにお花が咲き、そこから良い香りが漂っていました。ほんの少しの香りでしたが、秋の気配を感じさせてくれました。

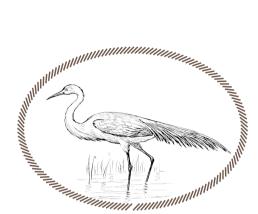
それから2,3日後、お庭に出たら、数日前とは比較にならないほど、キンモクセイはオレンジ色のお花をつけ、辺り一面に美しい香りを漂わせていました。このわずか数える程の日数の間に想像を超える木々の変化に季節の移り変わりを感じるとともに、神さまの深いいつくしみと創造されたものの美しさ、すばらしさとを感じないではいられませんでした。

私達の生活は、その神さまへの賛美がいつも根底にあるのだと思います。日々の 生活の中で、祈り、働き、神さまを賛美しながら過ごすことができる恵みに感謝し、 喜びのうちに歩んでいきたいと思います。



### 共に暮らす家である地球(ラウダート・シ 教皇フランシスコ)

#### Sr.マリア光惠(佐久間光惠)



青い空に、白鷺が飛んで行く。数十年前には、 日本の鴇が優雅に空に舞っていたそうです。そ の"鴇"も消えてしまった。

私達が共に暮らす家である、この地球を忘れていました。

命を生みだす、母なる大地を忘れていました。

沈黙の内にひとつ、ひとつの命を抱き、育み成長させてくれている、あなたを… 風にざわめく梢、波うつ無数の草木よ! 虫達は宿を借り、鳥たちは塒とし、獣は 子供を育てている。酸素を供給し、大気を浄化し、大地を潤し、全ての生きものに 食べ物を恵み、炎暑を和らげ、いつも側にいるあなたを忘れていました。

天から落ちる水、地から湧きあがる水、海へ流れ込む水よ! あなたによって万面の海は活性化され、再生され、深遠なる神秘が隠されているのを忘れていました。

あらゆる微生物の働きで、命を返したものたちは、分解され、新たな命の寝床が 誕生するのを忘れていました。存在する全てのものは、大きなものも、小さなもの も、互いに生かしあい、補い合って調和し、協力して大交響楽を奏でています。そ の様は、ただただ驚嘆するのみ。

万物を創造し、存在させ、いとおしみ包んでおられるお方がおられる。なのに、人類はこの素晴らしい秩序からはみ出してしまった。どうしてなの!!

呼吸をしなければ、私達は生きられない。コンクリートの道路と建物の中だけでは 生きられない。水分でおおわれているこの体は、水なしでは生きられない。プラス ティックのゴミの山の中では生きられない。木の実や草を食べ、魚や獣の命を頂か なければ生きられない! カプセルを食べては生きられない私達です。体温以上に 上昇する気温の中では生きられない。ああ・・私達は、あなたに無関心でした。感 謝する心を失っていました。そして、加害者であり、被害者になってしまいました。 私達の家である、この地球が痛み傷ついています。この家に住むあらゆる命が、不 安、恐れ、悲しみ、苦しみ、怒り、苛立ち、揺れ動いています。

どうすれば良いのか? 一人一人に投げかけられている重い問いです。

主よ… おしえて下さい… どうすれば良いのか… "祈りなさい、祈りなさい…

真剣に… いつなん時にも祈りなさい。捜しなさい、叩きなさい。"という声なき声がひびいてきます。私には、歴史的事実として起こった、二人の人の行いが思い出されます。

北海道の東、山村、鶴い村での事、昭和30年代、気候の変化、環境の変化で村の空に舞っていた丹頂鶴が姿を消した。一人のお婆さんが、毎日毎日、外に出ては鶴の姿を追っていた。来る日も来る日も。極寒の2月、遠くてヨロヨロ餌を捜している一羽の鶴の姿を見た。消えてしまったと思っていた鶴を見た喜びと感動で、お婆さんは呼びながら毎日トウモロコシを蒔き続けたが、鶴は現れなかった。それから2年後、枯嵐の吹く初冬、2羽の鶴がトウモロコシをついばんでいた。2羽ということは、つがいでしょう。鶴は一生を添いとげると言います。1羽増え、3羽増え、餌を求めて来る鶴が多くなり、お婆さんの家だけのトウモロコシではたりなくなりました。その話を近くの小、中学校の子供達が聞きつけ、協力してトウモロコシを集め、鶴に与えていました。このニュースが全国にも報道され、協力金が送られてくるようになり、餌をまかなうことができるようになりました。人々の優しさ、善意、協力によって滅んでしまった!と思われていた鶴を危機から救ったのです。お婆さんは天に召されましたが、その活動は引きつがれ、今でも続いていますし、丹頂鶴は絶滅種から外れました。

もうひとつの話、日高昆布は有名ですが、昆布の裏に愛と忍耐と涙と血がにじむような苦悩が隠されています。十数年前、NHKのドキュメンタリーで見たひとりの青年の生き方です。襟裳は、昆布の産地でした。昭和20年後半~30年代には昆布が取れなくなり、人々は仕事を求めて町へ出て行き、この青年の家だけが残りました。彼も悩み苦しみながらも残ることを決断し、昆布が取れなくなった原因をくまなく調べて歩き、気付いたことは、子供の頃には、山に沢山の木がはえていた。今では、山の木は切られ、裸になっている。入植して来た人達が、暖房にするため、山の木を切り、裸になったまま放置され荒れはてていた。人の言い伝えによれば"山の木が豊かでなければ、海が枯れる"と耳にしていた言葉を思い出し、山に木を植えることを決心し、取りかかった。春と秋には、地をならし、手で一本一本植林をし、夏には下草刈りをし、来る日も来る日も… 冬になればわずかばかりの昆布を拾って生活費とし、… 先が見えないあまりの辛さにやめてしまおうかという誘惑と戦いながら… 人々から "海を生かすのに、山に木を植えるのか… と笑われながら。そんな生活の中で、青年に縁談があった。彼は、こんなひどい生活で

は、相手を幸せにできない… と断りの返事をした。娘さんは、"その青年に会って、話を聞きたい"と言って、はるばる彼に会いに来た。彼のありのままの姿を見、話を聞いて帰って行った。その後の娘さんの手紙に青年のそばにいて、木を植え、育て、海を蘇らせたい、同じ仕事をし、彼の手助けをしたのです。親は、大反対をしていますが、自分を嫁にもらってほしい""という内容でした。彼女の熱意に負けて、二人は結婚し(式はあげられなかった)二人で木を植える生活が始まった。時間の流れの中でいろいろな事があった。木を植えだして、十数年、彼らの姿を見て、木が育っていくのを見て、ボツボツと協力してくれる人が出てきた。ある寒い年、強大な流氷が襟裳の海岸に押し寄せた。春になって流氷が去った後、海は黒く色が変わっていた。昆布が一面に押し寄せている。昔の人が、"流氷が昆布を運んで来る"とのことわざを二人は体験したのです。これまでの苦労が、やっと実を結んだ、木が海を生かすことを経験し、感動と喜びに二人は泣きました。深く心の打たれるドキュメンタリーでした。

肥沃な土地に育った木は、ミネラルやその他の物質を豊かに蓄えていて、水と共 に海へ注ぎ込まれて行く。土や木の持つ栄養が海を生かしている。何という神秘… 無駄なものはひとつもないのです。

二人の人から私が教えられることは、重大なこと、大変なことを変える力は上意から来るのではなく、名も無い庶民の心ある一歩から、地道に、粘り強く、やり続ける意志が、この世を少しずつ変えていく!!この地球に生きる一人一人が真摯に具体的にできることをなし、諦めないでやり続けていくと、かならず何かが変わっていきます。私はそれを信じます。

全ての命が守られ、成長しますように…



# ななちゃんはくったなし。

Sr.マリア洋子(穂積洋子)

もう何十年も前、私の家にはミーコというメスの猫が同居していました。生まれたばかりで捨てられていたのを弟が連れてきて、私も一緒になって強引に母を説き伏せて、家で飼うことになったのです。まだ小さくて、

とにかくかわいいので、子供の私たちは夢中になっていました。そして私たちはミーコと一緒に育ち、大きくなり、学校へ行き、就職し、私は修道院へ、弟はすでに関西の方で働き始めていました。結局、ミーコは猫としては大変な長寿である23歳まで生き、母に事情を聞くと、ある日どこかへいなくなった、とのこと。母は家族中で一番ミーコと生活した時間が長かったので、がっくりしてしまい、「きっとマリア様の膝の上で安らかに天国に行ったに違いない」と自分に言い聞かせていました。

さて、なぜミーコの話から始めたかというと、今修道院には「はな子」という猫がほぼ毎日やってくるからです。もっとも彼女(?)は私がフランスの本部修道院から戻ってくる前から出入りしていたので、私より先輩です。はな子は少なくとも2回、計8匹は子猫を生んでいる立派な母猫です。このうち5匹は去年生まれ、私の弟夫婦が苦労の末に捕獲し、保護猫活動をしている従妹のところへ連れていき、今はそれぞれ大切に育ててくださる家庭で幸せになっています。はな子は自分の子供たちのことを忘れたのかどうなのかわかりませんが、修道院はとりあえず安全だと思っているようです。敷地内で大きな工事があったので心配していましたが、作業員の方々がお帰りになったあと、ショベルカーにのぼってみたり、大きな袋の中身を点検してみたりして、すっかり仕事に参加しているつもりのようでした。

ところで私は、23年(正確には20年弱でしょうか?修道院に入ってからもミーコは生きていましたから)の実績があるし、フランスでも猫には好かれていたので、

かなりの自信をもっており、はな子にも他のウロウロしている猫にも十分対処できるはずだと思っていました。もちろん姉妹たちも、「スール・マリア洋子に一番馴れているね」、近所の方も「ほお!たいしたもんですなあ」と言ってくださっていましたから、私の自信はひたすら深くなっていくばかりでした。

が、私は一つの重要な事実を忘れていたことに気づき、愕然としました。母を脅迫しかねない勢いでミーコを飼ったにもかかわらず、ミーコを実際に世話していたのは母だったので、私自身は猫については素人だったのです。猫は魚とチーズが好きで(これはミーコの大好物だったからです)、ちゃんとこちらがその気になっている時には愛らしく遊び、静かにすべき時はしているはずで、間違っても人間の邪魔をしたり、迷惑をかけたりしないものだ、と思い込んでいたのです。

しかし、修道院のはな子は私の期待を見事に裏切ってくれました。気に入らなければたとえ魚でも、フンと横を向き、こちらが遊べる自由時間にはどこかに雲隠れし、つい先日は屋根の上にのぼってしまい、こちらが大変な思いをして梯子をかけて手をのばしたらパシッ!とうとう一晩屋根の上で過ごし、翌朝は降りるのが怖くてニャーニャー叫び、途中で抱いてやったのにお礼の一言もありません。

では私の心はくじけ、猫嫌いになったのでしょうか?そうではありませんでした。 はな子のおかげで私は(たぶん)初めて母性愛の芽生えを感じたのです。修道女で ある私は人間の子供を持つことはありませんでしたが、この小さな生き物に対して なんとも表現できない優しさをもつようになり、この心情を通して私自身の母が注 いでくれた愛と、私たちに対する神さまの深い深い慈しみに満ちた愛に触れること ができました。たかが猫、でもこの小さな被造物を通しても神さまは働かれるのです。

はな子はとても気の強い猫です。そして要求がはっきりしています。はな子が今、 と言ったら今!なのです。そして、私は修道生活の範囲内で、神さまがはな子と共 にいさせてくださる間は、はな子が幸せであるようにしてあげたいと思っています。

母がその子を慈しむように、わたしはあなたを愛している。

(イザヤ書より)

# # 18' 2

#### Sr.鈴木喜代

昨年末、中国・武漢から発生した新型コロナウイルスの感染が急速に広がって、 パンデミックとなり、世を震撼とさせている。秋になっても感染者は続き、少しは 収束に向かっているかに見えたが増え続けている。

地球も悲鳴を上げている。温暖化による異常気象の増加、豪雨、森林火災、プラスチックゴミによる海洋汚染、南極の氷解、国・民族間の紛争など…など。

これらは、zこれからも続くだろう。時には先が見えなく、希望も持てなく不安、 恐怖、苦しみ、悲しみが続くのかもしれない。しかし、人間は与えられた命を生か し、生きる使命があるのです。

このような中で見つけた、インドのタゴールによる詩集の中に「ベンガルの祈り」が収められている。これを読んで、祈ることへの大切さを教えられて力づけられた。ここに記します。

危険から私を守ってくださいと祈るのではありません。 危険の中にあっても恐れることのないようにと祈るのです。

悲しみや心の痛みの最中にある私を慰めてくださいと願っていません。 悲しみから立ち上がる力をくださいとお願いしているのです。

追いつめられたときにも崩おれることのないように、 世間的な失敗、挫折を繰り返してもそれらが取り返しのつかないものだと考 えることがないように助けてください。

私を救いに来てくださいと祈っているのではありません。打ち克つ力がほし いのです。

重荷を軽くして楽にしてくださらなくてもいいのです。重荷を担う強さをお 与えください。

### 主よ、あなたの栄光は今ここに

Sr.船田 由美

・志願期の時でした。教会で一緒に仕事をしていたTさんから驚きの手紙をいただきました。長上に話した後、母に手紙を書きました。「私が信頼しているHさんにこの手紙を見ていただき2人で主任神父様を訪ねて下さい」と。数日後に届いたHさんからの手紙には「主任神父様に話すとTさんは教会を離れるでしょう。だから話さないほうが良いと思います。船田さん辛いけれど我慢して下さいね。」と書かれていました。辛い日が続きました。志願者の私は共住生活を教わりながら一日一日を生きていくのが精一杯でTさんの手紙はいつの間にか忘れました。

月日は流れ、主の慈しみのうちに終生誓願宣立の1991年9月14日十字架称賛の祭日を迎えました。私は驚きました。聖堂の一番後ろの席にTさんの姿を見つけたのです。首をうな垂れ肩を落としてすわっている苦しそうなTさん。なんと声をかけたらいいのかわかりませんでした。私は無言のままそっとTさんの両肩に手を置きました。私の心は静止していました。考えることも感じる事もできない数分間でした。そして、黙ってTさんから離れました。ミサ後、聖堂にTさんの姿はありませんでした。

数年後、Tさん帰天の知らせを受けました。最期まで教会を離れなかったことを知り、主に感謝しました。そして今年、Tさんが全ての苦しみから解放されてニコニコしながら「ふなあさん」と言ってお顔を見せて下さいました。私は「あ、天国にいらっしゃる」とすぐわかりました。Tさんの苦しみはどれほどでしたでしょう。終生誓願式に出席するのにどれほどの勇気がいったでしょう。Tさんは愛によって苦しみを乗り越えられたと思います。Tさん、天国で祈っていて下さいね。Tさん、ありがとう。主に、賛美と感謝。

・入会前にAさんというどうしても許せない人がいました。修練期の時、黙想指導の神父様にそのことを告解致しました。神父様は聴いて下さった後、「今は許せなくて良い。」とおっしゃって下さいました。そのことばは、今はこんなに弱い信仰しか持っていない私への主イエスの優しさに思えました。その人を許すことの出来ない原因も辛いものでしたが、許せない私であることも大きな苦しみでした。

そして今年のある日、友人からAさんが重い病気で苦しんでいる知らせを受けました。その時私の心の奥から「Aさん、ありがとう」という優しい温かいことばが昇って来ました。主が下さった真のことば。そこにはもう「許せない心」はありませんでした。「父よ、彼らをお赦し下さい。」「互いに愛し合いなさい。赦しあいなさい。」御自分の身をもって極みまで愛、赦しを生きられたイエス。恥をもいとわず十字架を受け止められたイエス。私を罪から解放し真の自由と喜びに招いて下さる小道。このイエスにならいたい。でも今の私は頭でわかっているだけ。イエスの真実の呼びかけはやはり怖い。でもその道を歩みたい。

・あることで許せない姉妹がいました。告解でその苦しみを神父様に話しました。勧めを下さる時、神父様は何度も「栄光、栄光」とおっしゃいました。告解は そこで私を待っていて下さる主イエスにお会いする場です。だからそこでいただく ことばは司祭を通して主が語って下さっていることばだと思います。

私は主に祈りました。「あなたの栄光は、いつどこにどのように現れますか?」そして土曜日の夜、主の栄光は私の心に留まりました。恵みをいただいたのがわかりました。私はすぐに許せない姉妹にメモを書きました。「明日、少し時間をとって下さいますか?」そして私は彼女に言いました。「あることであなたを許すことが出来ませんでした。どうぞその私を許して下さい。」私一人ではとても言えないことば。主が言わせて下さったことば。一歩踏み出す事が出来ました。自我に生きている時が一番苦しい。終生誓願の時に主からいただいた標語「はい父よ!」とタイトルの「十字架につけられたイエスのSr. 由美」を日々生きられる時こそ真の幸せ。主よ、最期まであなたに倣って生きていきたい。助けて下さい。母マリアいつも祈っていて下さい。



## 召命を願って

Sr.大場幸子



その年の復活祭の夜、私はJR茂原駅発白子車庫行きの最終バスで修道院に着いた。玄関に出てくださったシスターに「きょうは、もう来ないのかしらと思った。」と言われてしまった。ドアが開いたとき、私の心がパッと開いたのを感じた。すぐに用意されていた食事を

いただいた。シスター達は沈黙のうちに片づけをしていた。こうして初日からシスター達には迷惑を掛けることになってしまった。

その日の昼過ぎ、腹の底から突き上げてくる苦しさに深いため息をつきながら持って行く荷物を前に座り込んでいた。今、家を出ないとバスも無くなると自分に言い聞かせて立ち上がった。その部屋の窓から北側の外を眺め、隣りの八畳間に行って東と南側の外の様子を見、部屋を見回してから下に降りていった。背後で肩を落としている私に「大丈夫なの?」と言う妹に「ううん。」と言って、それ以上何も言わなかった。それから玄関に続く廊下に座り、障子を開けて六畳間のベッドに寝ている母に「お母さん行きます」と挨拶すると、母は「体に気をつけて。」と言うと顔を横に向けてしまった。涙を見せたくなかったのだろう。

玄関のドアを閉めると、私は"時が来るまで実家には絶対に帰らない"と心に誓った。

入会前の黙想と生活体験中、私は姉(私が中学生の時、母が倒れ、その時以来親 代わりになっていた)に修道会に入ることを決めたと手紙で知らせた。翌日、姉か ら速達が修道院に届き、世間で信仰を生きた方がどれ程いいかとあったが、私の心 は揺らがなかった。修道院で幸せに生きていれば何よりの証しだと思ったからだ。

志願期を終えて、修練期に入るお許しをいただき、修練期開始の日をアビラの聖テレジアの記念日の日を選んだ。アビラに何度か行って、聖女の生家や修道院で自分の召命のために祈ったことがあったからだ。一年もたたない翌年の8月の末、修

練長から「家に帰ってお母さんを見舞ってらっしゃい。」と言われ、まだ家に帰るのは早いのにと思いつつ、実家に帰った。母とはことばを交わすことは出来なかった。胸に愉気をしてあげるととても気持ち良さそうだったが、私の方が耐え切れなくなって、その場を離れてしまった。

帰院して4日後、姉からの知らせで母が危篤であることを知らされた。"お母さん。お母さん。"翼があったなら、飛行場が近くにあったなら、飛んで帰りたかった。当時はまだ成田空港は無かった。今では車で1時間で行ける。修練長から「この間、会ってこられたし、今から行ってももう間に合わないでしょう。」と言われ、「はい。」と思いにけじめをつけて、すべてを神様に委ねた。

修練期は養成のため、会の精神、会則、聖ベネディクトの戒律等、神のうちに生き、祈りの人になることを学ぶ恵みの時である。種々の学びの中で、会則の中にあったこの項目が心に染み込んだ。"親しい人々から離れるようにとの主の招きは、当然犠牲が伴う。この犠牲を寛大に受け入れると細やかな心づかいになり、近親者の生活に深い思いやりがもてるようになる。" 家を出るとき、主イエスは私の重い心、体をどれ程の愛と力で、押してくださったか、今そのことを思うと、自分の力では出来ることではないことだったと思い起こす。

修院付司祭によって、毎日ミサに与れること、年の黙想やいくつかのセッションを通して、自分を知り、成長させてくださる機会を与えられる事は大きな喜びである。

名古屋でカテキスタの勉強をしていた時、教会史の講義の中で各修道会の創立者についての説明に聖ベネディクトの精神は"一人一人を重んじる。"という講師の話が深く心に留まり、実際に共同体で生きて実感したことだった。一人一人の個性を活かし、寛大であることを。

終課(その日の仕事を終え、一同、聖堂で祈る寝る前の祈り)の結びの祈願で心が広がり、明日への希望を与えられる祈りがある。 主日に。

主よ、つつしんでお願いいたします。今日、わたしたちは御子の復活の神秘を祝いました。どうか、あらゆる災いを免れて平安のうちに憩わせてください。そして、

明日の朝、喜びをもって再びあなたへの賛美の歌を歌うために目覚めることができますように。私たちの主イエス・キリストによって。 他の曜日に。

慈しみ深い父よ、わたしたちを罪の重荷から解放してください。夜を迎える今、全世界の上にみ手を広げてください。これから一日を始めようとする人々とこれから眠りにつこうとするわたしたちがあなたのうちに一つに結ばれますように。 私たちの主イエス・キリストによって。

日々、全世界のため、全教会の発展のため、現代社会のため、人々の救いのため、 教皇様、司祭、修道者、信徒のため、恩人、友人、家族、又、特別な意向で度々祈っている。

聖書のことばに常にふれ、味わい、賛美することが出来ることは何よりの恵みと喜びである。



庭園に植樹された「ゆずり葉」

# 神のはからい

Sr.金井玉枝



今年の春、妹から、目の手術を東大病院で受けるという知らせ があった。

コロナの病棟が、眼下の病棟まで進出して、白内障と緑内障の 手術を受ける妹の入院は数か月も伸ばされてようやく入院し、手 術を受けて片方の目は視野も広がり見えるようになったという妹 の声を電話で聞けた。

4人兄弟の中でも私と妹は身近に育てられた。

学齢になり、私は2年遅れで、2歳年下の妹と同級で小学校に入学し、黒板がようやく見える前列に妹と並んで席を取らせていただき、いつも妹が手引きをしてくれた。妹は勉強が嫌いで一日中外で男の子や女の子たちと遊んでいた。「いじめっ子が来たら私がやっつけてやるからね」と言いながら私を近所の子たちの仲間に誘い出したりした。

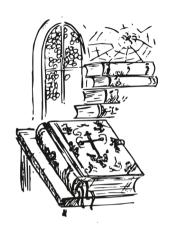
家では、私はまだいくらか見えていたがいつも日当たりのよい居間の座敷でうつ 伏せになり、ラジオから流れる童謡歌手の歌を聞きながらいっしょに歌って楽しん でいた。

見えないことが当たり前のように生活している私に、妹からその手術のために祈りを依頼されて不思議な気持ちになっている。

私は小学校から盲学校に転校し、大学在学中にカトリック教会で洗礼の恵みにあずかり、修道生活に召されました。緑内障のおかげでこんなに幸せな生活を送れるようになったのです。

### 聖なる読書(レクチオ・ディビナ)

Sr.赤井幸子



今年は思いもよらなかった(予言もあったようですが) 出来事として、新型コロナウイルスの出現で人々の生活に 大きな変化をもたらしました。特に外出規制で大多数の人 たちは家の中での生活をどのように過ごすかとまどった方 もいたことでしょう。

その中で普段、読むことの出来なかった本に向かって読 書に時間を使った方もいたことでしょう。私の友人も毎週、

図書館に通って数冊本を借りて読みましたと言っていました。

聖ベネディクトの戒律の中の48章は「日課の労働について」という箇所に「怠慢は霊魂の敵で、そこで修友は一定の時間を労働にあってさらに他の一定の時間を\* 聖なる読書に割くものとします」

(時間を割く)→割かれた時間的な空間を祈りと読書と労働で満たす。

修道院の生活は起床から就寝までの時間割があります。時間割の根底には、解説によると時間は宇宙と共に創られ、人間は時間的な存在であり、時間の枠組みの内でおこなう行為作業生活が人に重大な意味があるという考えがありますと。

新聞の記事の中にも家での過ごし方を時間割を作ってというすすめの記事があったり、仕事の他に遊びや体操、料理の作り方などいろいろな生活の仕方が載っていました。

今はGO-TOで外出も多くなりましたが、コロナ禍後の生活はまだまだ注意が必要で家で過ごすことが多くなってきていることでしょう。与えられた人生の中で時間をどのように過ごすか。有意義なものとできますように。

\*読書そのものが聖なのではなく読書の内容が聖であるという意味(神との出会いと一致に導くもの)

- ○目に見えぬ コロナウイルス 世界を変える
- ○「おそれるな」 いのちのことば 信じます
- ○ゆうぐれに おしろい花の 香り立つ 暗闇の中 咲き続けり
- ○ノラ猫の ひるねのすがた やすらかに



### 感謝を新たに

WHENE WENT HER WENT HE WENT HER WENT HE WENT HER WENT HER WENT HER WENT HER WENT HER WENT HE WENT HE

Sr.Veronica(高橋和子)



今年は思いがけないことが二度ありました。

これらの事を通して体験したことを、皆さんと分かち合い たいと思います。

まず、2月5日、日本26聖人の祝日の朝、ミサの後、この修道院の最年長のシスター服部が、元気でいつもと変わらない生活をしていたのに、突然倒れて救急車で病院に運

ばれましたが脳内出血でそのまま天に召されてしまいました。

私よりも修道生活が七年先輩のシスターで、私は入会した日からお世話になりずっと一緒に修道生活を歩んできました。彼女は性格として決して目立つことはありませんでしたが、生涯、志願者の係を忠実に果たしつつ、修練長と若い人々の両方の支えとなって奉献生活を全うしました。

同年輩の私は「あのように、このいただいた奉献生活を全うしたい!」との思い を新たにさせられました。

もう一つの体験は、8月中旬のある日、突然に体調を崩し救急車で病院に運ばれ、 約一か月間茂原の病院でお世話になった時のことです。

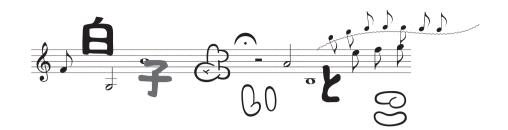
用事があってブザーを押しますと、看護師さんが、いつも飛んでき来られ優しく、 一人一人の願いを聞き、すぐに対応してくださっていました。

この体験を通して、「修道院で生涯、共同生活を送る私もあのように他の人、一 人一人を心から大切にして生きたい!」との思いを新たにさせていただきました。

また、同時に、私がここの修道会に入会するときからずっと、お祈り、その他でいつも支えて下さる多くの方々への感謝をも、新たにしております。

皆様、本当にありがとうございます!

心からの感謝を新たにしつつ。



Sr.Francisca (岡島静代)

"白子よいとこ、一度はおいで" 以前一人の姉妹がウクレレで替え歌を歌ってくれました。

45年前、白子の地に念願の自分たちの修道院が建ち、いよいよ引っ越しすることになり、神言会の建物に間借りしていた私たちは、風光明媚の多治見市を離れることになりました。8月の暑い盛りの日でした。

東京を通過し、千葉に入りました。そして、白子の地に入った頃、「えっ!何! 山も丘もないよー!」真ったいらな土地。私の生まれ育った群馬県は、嶺の連なる 雄大な山々が遠くに見えていました。ここは見回しても何も見えない・・内心「こ んなところに修道院を建てたの?・・・」

夜になったら、もっと大変。ゴー、ザーと凄まじい音。「何?あの音、腹の底から響いてくる地獄の音!! 「あれは海の波の音よ」誰かが教えてくれました。

益々、逃げ出したくなりました。数年間夜の波の音には慣れませんでした。さらに、町の名前が「しらこ」、子供の頃私は非常に肌が白かったらしく、学校へ行くと男の子たちから「しろっこ、しろっこ、気味悪う」とはやされたのを思い出したのです。よりによって「しらこ」とは・・

でも住み始めてから気が付いたことがありました。地元の人々の優しさ、親切、気の良いところ。私たちはこの人々のお蔭でやってこられました。近隣の人々から、お店の人々から、業者の人々から、役場の人々から、福祉に携わっている人々から、医療の人々から・・平常の時も、困った時にもどれほど助けて頂いたことでしょう。おそらく他の土地では、出会えないほどの思いやりです。私は白子の人々の中で暮らす幸せを感じてきました。

修道院へ入ってから十数年振りに故郷へ帰った時のこと、あまりの変化に驚愕しました。家の周りにあった広い田んぼが消えていました。その代りに広い道路が造

られ大型店が並んでいるではありませんか。あのこんこんとわき出ていた清水も水神さまの鳥居もあぜ道もありませんでした。もう、ここは私のふるさとではなくなった・・そう実感しました。

白子に戻ったとき、あゝ今ここが私の本当のふるさとだと・・。テニスコートとサッカー場が増えたといっても、まだ広い田んぼがある、白鷺、こい鷺、カモ、海鳥が田んぼの上で翼を広げ飛び交っている。私は田んぼの間の農道を日曜日に歩く。祈りながら、幸せを味わいながら。冬にはツグミやモズ、春にはひばりやウグイス、そして、裏の用水路には亀の家族が棲んでいる。

海。波の音にも慣れてきて海まで行く。雄大な太平洋! 雄大な山々を見て育った私ですが、ここ、白子にも果てしない大海原の雄大さがすぐ目の前にあったのです。この白子町には自然が豊かに生きているのです。だから人々の心も豊かなのでしょう。

私たちは用事のある時にしか外出しませんし、町のイベントにも参加しません。 でも町の行事や出来事、人々の暮らしや経済などに関心を持っています。今年は コロナのために多くのホテルの窓が真っ暗な日が続き、テニスコートから歓声も聞 こえなくなり、心を痛めていました。9月の末頃からやっと子供たちの声がホテル から、テニスコートから聞こえて来た時はほっとしました。

私たちは、第一の使命である祈りを通して町の人々と連帯しています。そして町の人々の働きと共に神に賛美を日々捧げ、この祈りの中で、この町で生かされている感謝を神に捧げ、又人々への感謝を込めています。

さて、白子町も交通の便が良くなり、東京駅と千葉駅には高速バスが走るようになりました。皆さまが東京や千葉からいらっしゃる時に「ハッと驚き!修道院」と 覚えておけば良いのです。それは、八斗の停留所の次が驚の停留所でそこで降りる とすぐ修道院ですから。



### Sr. 服部美智子が帰天しました。



1937年 8月14日 誕生

1962 年 十字架のイエス・ベネディクト修道会に入会(フランス)

1965 年 9月30日 初誓願宣立 (フランス)

1970年 9月27日 終生誓願宣立(多治見)

2015 年 5月30日 金祝(誓願50周年記念)

2020年 2月 5日 帰天

本会がまだ日本に創立されていなかった 1962 年に 25 歳でフランスへ入会し、 1968 年に日本に創立されてから翌年に帰国し、終生誓願を宣立しました。

1969年より、多治見で志願者を受け入れ始めると修練長の補佐として、志願者のお世話係となり、それは、最期まで続きました。ですから、彼女の後輩であるほとんどの姉妹が彼女のお世話になっています。

82歳でしたが、院長秘書のひとりとして、養成者として、修道服係として、またそのほか様々な係を引き受けて現役で活躍していました。

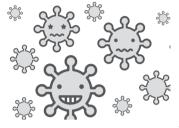
2月5日の朝、いつものようにミサのあと、仕事にとりかかりましたが、突然激しい頭の痛みを訴え、そのまま意識を失い、病院に搬送されましたが、約一時間後に息を引き取りました。

突然の急逝に私たちは驚愕し、信じられませんでした。お別れもできず、一瞬の うちに大きな悲しみに打ちひしがれてしまいました。

長い間、身体的な痛みと不自由さを淡々と耐えて、それを笑顔で捧げていた日々でした。今、身軽になったのでどこでも自由に飛び回っているかもしれません。 姉妹を一言で言い現わすとしたら「忠実さ」でしょう。誠実に真実に修道生活を生きていたからです。



#### エンマヌエル 野口 (トラピスト)



令和2年1月16日に日本で最初に新型コロナ感染患者が報告されて以来、新型コロナウイルスによる肺炎患者が中国武漢市に爆発的に発生したというニュースを対岸の火事のように聞いていた私たちは、瞬く間に拡大して行く感染の予防と対策に振り回されてしまった感じがす

る。空気感染はしない、対人感染はしない、納豆が予防に有効などと根拠が曖昧であってもどこかで安堵していた時に入ってきた有名人の訃報は、強烈な恐怖感と言いしれぬ不安感をかき立てた。「喉元過ぎれば熱さ忘るる」がモットーのような日本人をして心底から震え上がらせて余りあり、マスクやソーシャル・ディスタンス、三密を避けましょう、などと自衛団的な姿勢は未だに健在だ。そのような社会の動きと連動して、教会活動もまた制約を否応なしに受け、日本でも各司教区は政府や地方自治体の方針に沿った種々の指針を迅速に発表し、小教区における予防策の周知の徹底をはかってきた。

白子修道院が所在する東京大司教区もいくつもの指針を発表し、私たちは茂原教会でのコロナ予防対策の実施方法は手本としてさせていただいたし、主任司祭であるルイス真境名神父様の白子修道院訪問の折の具体的な指示は大変心強いものであった。そのご指示に沿って白子修道院の毎日の聖体祭儀は外部信徒の皆さんには残念ながら非公開のままに続いている。非公開とは言え、姉妹たちの座席は隣とは空席を挟み、十分なスペースを聖堂では取っている。それでも信徒方の参加しない非公開の毎日のミサの中ではいつも通りに姉妹たちは高らかに聖歌を歌い、コロナ以前とそれほど変化は見られない。

自分たちがほとんど変わっていない生活を続けていると、修道院の外部もそんなに変わっていないのではないかと錯覚してしまう。私の習慣である早朝の散歩時には、マスクをしている人とすれ違うことは滅多にない。ところが、昼間になると様相が一変する。、病院や歯科医院に診察のために外出したり、コンビニに立ち寄っ

たりすると、消毒とマスクと、発熱しているかどうかに、とても敏感にチェックが 入る。医院では受付前に手洗いと手指の消毒、体温測定器を身体に当てられた後、 この数週間、自身か家族に発熱がなかったか、県外からの訪問者がなかったか等の かなり詳細にわたるアンケートが毎回実施されるほどの入念さだ。自転車に乗って 外出して、途中でマスクをしていない、ザックの中に入れてもいないことに気づい て慌てて家に取りに戻ったことが数度ある。

毎日、ミサ聖祭や典礼はいつもの通りで、生活上の制約や変化のほとんどない修道院内での生活とは別に、小教区に属する信徒方の信仰生活は大きく変わざるを得なかったことは想像に難しくない。東京教区では9月16日までは75歳以上の信徒の方は小教区の教会でのミサにあずかることも遠慮していただいたし、年齢制限が廃止された今もなお小教区のミサへの参加には人数制限や、信徒席での歌唱なしなどの制約が付随している。茂原教会では苗字が「あ」から「そ」のグループと「た」から「わ」のグループの二つに分かれて日曜日午前中に別個のミサにあずかるのだと伺った。主日に数度ミサ聖祭を司式される主任神父様のご苦労にも頭が下がるが、奉仕される当番や教会役員の方々のきめ細かい配慮にはどのようなねぎらいの言葉をかければ良いのであろうか。感謝の言葉が出るだけである。

社会では毎日会社に通勤する代わりに、一部では自宅での作業や、会社内の会議 もインターネットを用いたWebテレビ会議などを導入している所もあると聞く。茂 原教会でも主日のミサ聖祭に参与できない方々のために、Youtubeという動画サイ トを介したミサの録画中継を行うという独自の活動を行なっていた。全国でも司教 区レベルではあるのだろうが、単一小教区として主日のミサ聖祭をアップしていた のはそう多くないのではないか。視聴者数もかなり伸びていたと聞いている。

バーチャルな次元でのミサ聖祭参加の増加とは逆に、これまでの小教区の活動、種々の勉強会や集会は軒並み中止や縮小せざるを得なかったのではないだろうか。 飲食を伴う集まりを催すことは特に避けられたであろう。教会で食事を共にする、 ということは単なる飲食行為ではなく、共に一つのキリストの体に養われた者が今 度は身体を養う物を分かち合い、奉仕し合う大切な場なのだと思う。教会はミサ聖 祭に参加して、はいさようなら、と別れてしまう集会ではない。

神と人との交わり、人と人との交わり、その十字路のような教会。ミサ聖祭参与もグループに別れることによって、教会で会える人と会えない人たちが生じる。仲の良い信徒同士なら教会外でプライベートに会うこともあるかも知れないが、共に一つの食卓を囲む友がいないミサはなんと味気ないことだろう。逆に、極論をお許しいただければ、日頃敬遠している信徒に囲まれて捧げるミサはどんなに居心地が悪いことだろう。会いたい人とは一緒にあずかることのできないミサや、あるいは不仲な友と会わなくても良くなったミサに安堵してしまう。教会活動の奉仕のために費やしていた時間から解放され、責任を担うこともなくストレスから解放されて自由な時間が増えたと思うに至るならば非常に残念なことだ。

人生に意味のないことはない、とよく言われる。個人的レベルでそうなら、今年 起きた様々の地球的出来事にも意味のないことはないはずだ。コロナ禍で小教区の 信徒の方々は自分の信仰のあり方、日常の実践について振り返る大きな機会を得た のではないだろうか。いくつもの制限付きの不自由な教会活動は、人と人との交わ りに多大な影響を与え、信徒の交わりを疎遠にしてしまった。それを居心地悪いと 感じるか、あるいは、かえって、一人でパソコンを開いて好きな時間にネットでミ サに参加し、祈り、聖書を読み、教会に行かなくても信仰は守れるとお手軽な信仰 生活に慣れてしまうのであろうか。

そのどちらをも見据えながら、いつかまた私たちがコロナ発生以前の状況に戻れる日がいつ来るのか分からないが、果たしてコロナ以前の小教区活動に戻れるのか、あるいは、戻るとしても、この時期に私たち一人一人が、それぞれの場で経験してきた信仰のあり方についての考察をどう活かしていけるのかが問われるのではないかと思う。それを小教区に属している信徒の方々への問いとしてだけではなく、修道院生活を営む私たちにとっても次の時代へ進むためのチャレンジとして捉え直したいと思う。





### 2020年における主な事柄

藤岡氏による音楽レッスンがありましたがコロナのために数か月お休み。

\* 12月25日~1月23日 ジュリアーノ修道士の滞在と聖書講義

\* 2月5日 Sr.服部美智子帰天

\* 2月24日~ 25日 杉本ゆり氏によるグレゴリオ聖歌の指導

\* 4月3日 信徒修練所(ベネディクト館)起工式

\* 4月24日 4月に着任された茂原教会の主任司祭ルイス神父さま訪問

\* 8月14日~9月10日 Sr.高橋入院

\* 10月23日 9月末日に完成したベネディクト館落成祝福式

\* 10月25日 町の津波避難訓練に参加

\* パ 院長交代によりSr.岡島静代着任

\* 10月29日 消防署指導による火災避難訓練

\* 11月2日~6日 藤原師滞在と黙想指導

\* 11月9日~10日 杉本ゆり氏によるグレゴリオ聖歌の指導

\* 11月22日~12月1日 聖心会Sr.吹田とSr.長谷川による共同体の年の黙想会

